

授 業 概 要 (シラバス)

科目名		小児歯科学・障害者歯科学（１）単位	講師名	有田憲司 先生
学年		2 学年	総授業時間数	28 時間
授業概要		歯科衛生士として必要な小児歯科学・小児歯科医療および障害者歯科学・障害者歯科医療に関する知識を講義する。		
授業到達目標		1. 小児の心身の発育および障害者の特徴を理解する。2. 小児および障害者の口腔疾患の特徴を理解する。3. 小児歯科診療および障害者歯科診療における診療補助について理解する。4. 小児および障害者の口腔保健指導について説明できる。		
成績評価基準 評価方法		1. 授業への出席数 2. 授業態度 3. 試験の成績 上記の事柄を参考に総合的に評価し、合否を決定する。		
使用テキスト		新 歯科衛生士教育マニュアル 小児歯科学 （クインテッセンス出版）		
その他 (特記事項)		43期生～		
授業計画表	1回目	1. 小児歯科学とは 2. 心身の発育 3. 小児の生理的特長 4. 顔面頭蓋の発育 5. 歯の発育とその異常 6. 歯列・咬合の発育と異常		
	2回目	1. 小児にみられる齲蝕 2. 小児にみられる歯周疾患 3. 小児にみられる口腔軟組織の異常と疾患		
	3回目	1. 小児期の特徴と歯科的問題点 2. 小児歯科における診療体系 3. 母親教室 4. 小児歯科における患者との対応法		
	4回目	1. 歯科衛生士による齲蝕予防法（プラークコントロール、フッ化物の応用、小窩裂溝填塞法、食生活指導）2. フッ化ジアンミン銀塗布 3. 小児の口腔保健管理		
	5回目	1. 小児の歯冠修復と診療補助 2. 小児の歯内療法と診療補助		
	6回目	1. 小児の外科および外傷処置と診療補助 2. 咬合誘導と診療補助 3. リコール		
	7回目	1. 障害者歯科学とは 2. 主な障害とその全身的・歯科的特徴 3. 障害者への対応 4. 小児の摂食・嚥下障害		

授 業 概 要 (シラバス)

45期生

科目名		口腔解剖学 (3) 単位	講師名	松田哲史 先生
学年		1 学年	総授業時間数	60 時間
授業概要		口腔解剖は歯科衛生士にとって、必ず理解していなければならないもので、名称を理解することは専門職の人々との共通の認識をもつことになる。また、口腔組織を理解することは、患者さんへの説明のツールとなるものである。		
授業到達目標		歯科医学の基本知識である歯の種類、歯の形態、方向用語などを知識とすること、また歯を構成する組織の構造を理解することを目的とする。		
成績評価基準 評価方法		筆記試験に各種提出物を加味して総合的に評価する。		
使用テキスト		①最新 歯科衛生士教本 歯・口腔の構造と機能 口腔解剖学 口腔組織発生学 口腔生理学 ②基礎から学ぶ歯の解剖 歯科衛生士シリーズ 「口腔解剖学・口腔組織発生学・口腔生理学」		
その他 (特記事項)				
授業計画表	1回目	口腔解剖総論	9回目	歯の発生
	2回目	口腔解剖総論	10回目	エナメル質
	3回目	永久歯 (切歯)	11回目	象牙質・歯髄
	4回目	永久歯 (犬歯・小臼歯)	12回目	歯周組織
	5回目	永久歯 (小臼歯・大臼歯)	13回目	歯周組織
	6回目	永久歯 (大臼歯)	14回目	顕微鏡実習
	7回目	永久歯 (大臼歯) 咬合	15回目	顕微鏡実習
	8回目	乳歯異常		

授 業 概 要 (シラバス)

科目名		生理学 (1) 単位	講師名	内橋賢二 先生
学年		1 学年	総授業時間数	30 時間
授業概要		お腹が空いたり、暑いと汗が出たり、運動したり、恐怖に慄くと心臓の拍動や呼吸が激しくなる。近くや遠くを眺めても、ピン트가自然と合い、いちいち考えなくても歩いたり、走ったりがバランス良く行われる。生理学はこのような正常な生命活動のメカニズムを探究する。		
授業到達目標		生体で営まれる生命現象には、感覚系機能（特殊感覚、体性感覚および内臓感覚）、動物系機能（随意運動および反射運動）および植物系（自律神経系および内分泌系）の3つ系統で成り立っており、これら各系統のシステムおよび関連性を十分理解することを目標とし、生命活動の機能面を追求し、病的状態の異常を理解する		
成績評価基準 評価方法		レポート評価（20%）、期末試験（70%）、平常点（10%）で評価する。授業への出席と受講態度の評価を平常点のみならずレポート評価に加味する。生理学を理解するためには、広範な知識の積み重ねが重要なので、レポートおよび試験結果において偏りのないことを評価に加味する。		
使用テキスト		歯科衛生士テキスト 「生理学」 学研書院		
その他 (特記事項)		参考書：最新歯科衛生士教本 「歯・口腔の構造と機能、口腔解剖学・口腔組織発生学・口腔生理学」医歯薬出版		
授業計画表	1回目	生理学の基礎知識 ・ホメオスタシスとは 体液とその機能 ・体液の組成・血液・リンパ液		
	2回目	消化と吸収 ・消化器の構成・消化運動・消化酵素・消化ホルモン・腸管での吸収 神経系1 ・ニューロンとシナプス・神経系の分類・末梢神経系の分類と機能		
	3回目	血液循環 ・心臓の構造と機能・循環調節・心音・血圧 呼吸 ・呼吸器の構造・呼吸機能調節・排容量		
	4回目	神経系 ・ニューロンとシナプス・神経系の分類（中枢・末梢神経系の機能）		
	5回目	内分泌系 ・内分泌腺の種類と機能 ・ホルモンの作用機序と機能異常		
	6回目	体液平衡と腎機能 ・発汗・体温調節 ・尿の生成・腎臓の構造・ネフロン機能・腎機能の調節機構・尿の組成		
	7回目	学内実習		
	8回目	まとめ		

授 業 概 要 (シラバス)

科目名		口腔外科学 (1) 単位	講師名	高杉 典史 先生
学年		2 学年	総授業時間数	28 時間
授業概要		口腔外科学は、口腔・顎顔面領域の疾患および口腔に関連する全身疾患について、その原因や病態、治療方法などを学ぶ分野である。また、患者の全身状態を把握することや、観血処置などの介助に必要な知識を習得することを目標とする。		
授業到達目標		口腔外科手術（抜歯や嚢胞摘出など）の適切な介助法を理解・習得することを目標とする。また、その習得において必要である口腔・顎顔面領域に発生する疾患の病状、診断、治療法および口腔外科手術の基本手技について理解する。		
成績評価基準 評価方法		出席状況、授業態度および単位試験により総合的に合否を判定する。		
使用テキスト		最新歯科衛生士教本 顎・口腔粘膜疾患 口腔外科・歯科麻酔（医歯薬出版）		
その他 (特記事項)		講義やテキストだけでは実際の様子はイメージしにくく、内容の理解は大変かと思いますが一緒に頑張りましょう。		
授業計画表	1回目	・総 論 : 口腔・顎顔面領域に発生する疾患についての概説 ・先天異常: 顎・口腔領域の先天異常、発育異常について		
	2回目	・外 傷: 軟組織の損傷、歯の外傷および顎骨骨折について ・顎関節疾患: 顎関節脱臼、顎関節症について		
	3回目	・嚢 胞: 顎骨内に発生する嚢胞（歯源性・非歯源性）、軟組織に発生する嚢胞について		
	4回目	・腫 瘍: 良性腫瘍（歯源性腫瘍、非歯源性腫瘍、腫瘍類似疾患）、悪性腫瘍について		
	5回目	・粘膜疾患: 口腔粘膜に生じる疾患（水疱形成、紅斑およびびらん、潰瘍、白斑を主徴とする）、全身疾患に関連して生じる粘膜病変について		
	6回目	・唾液腺疾患: 唾液腺に生じる疾患（唾石症、唾液腺の炎症、シェーグレン症候群、唾液腺腫瘍）について ・神経疾患: 三叉神経痛、顔面神経麻痺について		
	7回目	・小手術: 抜歯、嚢胞摘出術および消炎手術に必要な器具、術式および介助について		

授 業 概 要 (シラバス)

科目名	病理学・口腔病理学 (2) 単位		講師名	木村 彩子 先生
学年	1 学年		総授業時間数	60 時間
授業概要	病理学では、病気とは何かを学びます。すなわち、病気とは正常な形態や機能を逸脱した状態で、病気の原因（病因）、どのようにして発生するのか（発生機序）、どの部位に発生しやすいのか（好発）、どのような特徴があるのか（所見）、病気の結果どうなるのか（予後）について学びます。			
授業到達目標	病気概念を学んだのち、歯・顎・顔面・口腔領域に発生する病気（疾患）の理解と臨床上的での予防と治療につなげることを目標とします。			
成績評価基準 評価方法	授業への参加度、中間試験・単位試験にて評価します。			
使用テキスト	新・歯科衛生士教育マニュアル「Pathology病理学」クインテッセンス出版			
その他 (特記事項)	組織学、解剖学の復習。 欠席した場合は、その項目のレポートを提出。			
授業計画表	1回目	病理学概論 病因論	9回目	歯の沈着物と着色 う蝕
	2回目	先天異常 循環障害	10回目	象牙質・セメント質の増生 歯髄の病変
	3回目	代謝障害 増殖と修復	11回目	歯周組織の病変 口腔の創傷治療
	4回目	炎 症	12回目	口腔粘膜の病変 エプーリス 口腔領域の奇形
	5回目	免疫と免疫異常	13回目	顎骨の病変 口腔領域の嚢胞
	6回目	腫瘍Ⅰ	14回目	歯源性腫瘍 非歯源性腫瘍
	7回目	腫瘍Ⅱ、中間試験	15回目	唾液腺の疾患 総復習
	8回目	歯の異常 歯の機械的損傷、化学的損傷		

授 業 概 要 (シラバス)

科目名		口腔治療学 (1) 単位	講師名	至田宗泰 先生
学年		2 学年	総授業時間数	28 時間
授業概要		新・歯科衛生士教育マニュアル 歯内治療（クインテッセンス）を中心に詳細に講義を行う		
授業到達目標		1. 歯髄、根尖性歯周組織疾患における分類・診査・検査・症状を学ぶ 2. 歯髄、根尖性歯周組織疾患の治療法を学ぶ		
成績評価基準 評価方法		単位試験で評価する		
使用テキスト		新・歯科衛生士教育マニュアル クインテッセンス		
その他 (特記事項)				
授業計画表	1回目	1. 歯内治療学概論 2. 歯の硬組織疾患の概要と治療法		
	2回目	歯髄疾患の概要		
	3回目	1. 歯髄疾患の治療法 2. 根尖性歯周疾患の概要		
	4回目	根尖性歯周疾患の治療法		
	5回目	1. 根管充填 2. 根未完成歯の治療法		
	6回目	1. 偶発症と対応 2. 歯内・歯周疾患		
	7回目	1. 外科的歯内治療 2. その他		

授 業 概 要 (シラバス)

科目名		歯周病学 (1) 単位	講師名	梅田 誠 先生
学年		1 学年	総授業時間数	28 時間
授業概要		歯周病とは歯周組織に起こるすべての疾患である。そこで本疾患の病態、病因、発病、経過あるいは治療法などについて授業する。		
授業到達目標		本授業では歯周病の分類、病態、病因、予防、治療およびメインテナンス・SPT など臨床分野を中心に履修させ、歯周病の臨床を理解させることを目標とする。		
成績評価基準 評価方法		毎回の授業終了前に試験を行い評価を行う。		
使用テキスト		歯科衛生士講座 歯周病学 第6版 (永末書店)		
その他 (特記事項)				
授業計画表	1回目	歯周病の病態について		
	2回目	歯周病の病因と発病因子について		
	3回目	歯周病の分類と主要症状、ペリオドンタルメディシンについて		
	4回目	歯周病の診査・診断と治療計画について		
	5回目	歯周基本治療、再評価について		
	6回目	歯周外科治療について		
	7回目	歯周病の予防、メインテナンス・SPT について、全体のまとめ		

授 業 概 要 (シラバス)

科目名	歯科補綴学 (1) 単位	講師名	岡本 吉宏 先生
学年	2学年	総授業時間数	28 時間
授業概要	初めに歯科補綴学の概要、臨床に必要な専門用語を含む基礎知識について講義を行う。 その後、臨床的な治療の流れと補綴治療に伴う患者指導についての講義を行う。 この講義により臨床に応用できる知識を習得する。		
授業到達目標	歯質・歯列の欠損に対する修復（補綴）の臨床的意義と方法を理解する。 補綴治療後の術後管理について理解する。		
成績評価基準 評価方法	出席状況、講義態度、筆記試験の結果を総合的に評価する。		
使用テキスト	最新歯科衛生士教本 咀嚼障害・咬合異常1 歯科補綴 第2版 医歯薬出版		
その他 (特記事項)			
授 業 計 画 表	1回目	I 編 補綴歯科治療に関する基礎知識 歯科補綴とは	
	2回目	歯科補綴の概要 補綴歯科治療の意義と目的～歯科衛生士の役割	
	3回目	補綴歯科治療の基礎知識 II 編 補綴歯科治療の実際と歯科衛生士の役割 歯科治療における検査	
	4回目	クラウン・ブリッジ治療 クラウン・ブリッジ治療の概要、流れと診療の補助、 治療に伴うトラブルとその対応	
	5回目	有床義歯治療 全部床義歯治療の概要、流れと診療の補助、 治療に伴うトラブルとその対応	
	6回目	有床義歯治療 部分床義歯治療の概要、流れと診療の補助、 治療に伴うトラブルとその対応	
	7回目	インプラント治療 特殊な口腔内装置を用いる治療 歯科治療における器材の管理	

授 業 概 要 (シラバス)

科目名		歯科矯正学 (1) 単位	講師名	中山 雄司 先生
学年		2 学年	総授業時間数	28 時間
授業概要		歯科矯正学の基礎、歯科衛生士の役割などについて、視覚素材を使用しながら授業を進める。		
授業到達目標		歯科衛生士として必要な歯科矯正学の知識を修得し、歯科保健指導を行うことができる。		
成績評価基準 評価方法		定期試験の結果に受講態度を加味して行う。		
使用テキスト		歯科衛生学シリーズ 歯科矯正学 /医歯薬出版		
その他 (特記事項)		幼児期・学童期・思春期・成長期等さまざまなステージを対象とする学問である。対象とする学問である。対象とする人・口腔を頭に描きながら学習することを希望する。		
授業計画表	1回目	歯科矯正学概論 顎顔面、歯・歯列の成長発育		
	2回目	正常咬合、不正咬合の種類と分類 不正咬合の原因、口腔習癖		
	3回目	矯正診断に必要な資料と診断、矯正力による生体力学と生体反応		
	4回目	矯正装置・保定装置 1		
	5回目	矯正装置・保定装置 2、矯正治療の実際		
	6回目	矯正治療に用いる器具と材料		
	7回目	矯正歯科における歯科衛生士の役割 チーム医療と矯正歯科治療、MFT、矯正歯科治療に伴うリスクとその対応		